

(六実サッカークラブ) 対 (印西フットボールクラブ・イエロー) <準決勝>

雲ひとつない秋晴れと暖かな日差しの中、平成 21 年 11 月 15 日(日)千葉県ケーブルテレビ杯千葉県少年サッカー選手権 3 年生大会が浦安市少年サッカー場にて行われた。浦安市少年サッカー場は、最近開設された人工芝のピッチでコンディションは最高だった。

ピッチ内での試合直前ウォーミングアップでは、緊張と期待に満ちた選手の表情が窺えた。最初にピッチでウォーミングアップを始めた印西サッカークラブ・イエロー(以下「印西」)は、選手一人一人がボールを持ち、コーチをポストにして繰り返し入念なキックやシュートの練習が行われた。人工芝のピッチということもあってか、選手のキック力には驚かされた。一方、後からピッチにやってきた六実サッカークラブ(以下「六実」)は、控え選手も含め全員で数個のボールを回し、リラックスしているようだった。

午前 10 時、いよいよホイッスル。六実のキックオフで試合が開始された。両チームともに 4-4-2 のフォーメーション。序盤は、両チームともにドリブルで仕掛け、ボールの奪い合いとなった。六実の素早い寄せで、次第に六実のボール支配率が高くなってきた。短いパスとドリブルで右サイドを切り込んだ六実はコーナーキックを得る。右サイドからのコーナーキックを印西 DF がクリアするが小さく、六実の選手にわたり、ゴール左にいた森海渡(10 番)がパスを受けてシュート。ゴール左隅に先制点が決まった(前半 4 分)。

六実ディフェンス小山玲雄(2 番)、坂入輝大(6 番)は、印西の速攻気味のクリアーボールを冷静な判断で簡単にさばき、ピンチを何度も救った。また、六実 MF 森海渡(10 番)は、中央で巧みなドリブルを見せ、着実にトップへボールをつないだ。

印西 DF も相手のドリブル突破を幾度も防ぎ、素早い判断でトップへつないだ。右サイド、一瀬健太(11 番)のドリブル突破が多く見られた。また、ドリブルが苦しくなった時には必ず右 DF 赤間晴(9 番)がフォローし、素晴らしいキックでクロスボールをあげ何度もチャンスを作った。

前半は、ドリブルチャレンジを繰り返し、短いパスで攻める六実に対して、奪ったボールを素早くトップ、相手陣内へフィードする印西の五分五分の戦いとなった。

後半序盤は、前半と同じような攻防が繰り返された。ややスタミナ切れかと思われた後半 6 分。左サイドからのコーナーキックを相手 DF と競り合った石崎拳大(7 番)が頭に当てゴール。同点に追いついた。その後は、ジャブのようにロングボールを入れてくる印西に対して防戦一方となってきた六実はスタミナが切れ始めた。サイドからの攻撃にボールウォッチャーとなり、逆サイドのマークが手薄となってピンチが多くなってきた。

後半 10 分、右サイドを印西、播本慎太郎(8 番)がドリブル突破しセンターリング。シュートを打つものの相手 DF に阻まれゴール前で混戦となった。キーパーがキャッチし、キックしたが、副審の旗があがっていたことに主審が確認したところインゴールの判定となった。印西、逆転のゴールは、澤田英(6 番)であった。

その後も六実は防戦一方となっていたものの DF の素晴らしい判断とキックで、何度かチャンスを作っていた。印西は奪ったボールを素早い判断でロングキックし、相手陣内へ持ち込むことが多かった。

印西は、3 年生という年代にしては、しっかりとキックができる子が多く、早く確実に奪ったボールを相手陣内へ運んでいた。また、播本慎太郎(8 番)の素晴らしいオーバーラップからのドリブル突破は見ごたえのあるものだった。また、味方のクリアーやロングキック、ドリブルに対して必ずといっていいほど良い反応を見せていたのが印西、山下雅弘(10 番)だった。

一方、六実は、森海渡(10 番)のドリブルと、視野の広い判断力が目立ったもののチャンスを最後まで活かすことができなかった。また、DF の冷静な判断力は素晴らしく、決して無理をせず堅実に守っていた。

互いに一点目はコーナーキックからの得点で、逆転ゴールは、ゴール前の混戦の中でのゴールと、一歩も譲らない素晴らしい試合となった。

千葉県ケーブルテレビ杯 千葉県少年サッカー選手権 3年生大会

Penya F.C Brcelona Japan VS 柏イーグルス TOR'82 (W) <準決勝>

以下「PBJ」

以下「柏イーグルス」

準決勝 第二試合

$$\text{PBJ} \quad 0 \left[\begin{array}{cc} 0 & - 1 \\ 0 & - 3 \end{array} \right] 4 \quad \text{柏イーグルス}$$

から右へ弱く吹き始めた風はあるものの、晴天の絶好のコンディション。ピッチ上、各学年、常に上位に顔を出す、個々の技術に優れた「柏イーグルス」対8人の3年生と2年生がかみあって、堅い守りの「PBJ」の対戦。風下、柏イーグルスのキックオフで試合開始。前半、風下ながらボール支配率の高め、攻め込む柏イーグルスだが、PBJの粘り強く、集中した堅い守りにシュートまで持ち込めず11分に柏の初シュートまで、双方決定的なチャンスもなく一進一退。徐々に堅さが取れスピードにのった個人技で攻める柏が13分、ミドルシュートで先制。

後半、柏イーグルスは5名のメンバー、PBJも1名を交代しリフレッシュした立ち上がり。ピッチを広く使い落ち着いたゲーム運びの柏イーグルスが、切れ目のない素早い攻撃から3点を追加。やや後半、疲れの見える粘るPBJを下し、決勝へ進出した。

◇Penya F.C Brcelona Japan

背番号9番の斎藤君、反応素早い堅守GK12番三浦君を中心に、全員でバランス良くゲームを運ぶチーム。この試合は、失点後にやや元気がなくなったのは残念だが、攻守の切り替え意識が出来ており、視野を広くして、ピッチ全体を使いプレーしようとする全員の姿勢が感じられた。センスのある選手が多く、今後このゲームの経験を生かし、個性を伸ばしてくれば、更に結果もついてくるように感じます。

◇柏イーグルス TOR'92 (W)

選手一人ひとりの能力が高く、普段のトレーニングが活かされた好チームである事は言うまでもないが、登録選手が交代で全員出場するチームの姿勢も素晴らしいと思います。技術的には、ワンタッチ目を丁寧にプレーすること、ドリブルには入るリズム、スピードの変化を意識している事などが、全員に行き届いており今後の成長が楽しみな選手が多かったように感じます。

【得点】前半：13分 1番 木村君

・クリアボールをペナルティ外から右下スミへミドルシュート

後半：3分 8番 渡辺君

・5番、五味川君の左センターリングからゴール右上へミドルシュート

6分 2番 小野寺君

・こぼれ玉に素早く反応しゴール

10分 11番 長瀬君

・味方シュートにきっちり詰めて、GKのはじいたボールをシュート

ゲームの入り方次第ではPBJにもチャンスはあったと思われるが、試合巧者の柏イーグルスの地力が勝ったゲームであった。この年代では特に「ボールコントロール」「相手との駆け引き」「体のバランス」が大切だと感じます。サッカーにつながる、楽しく身に着くそれらのトレーニングを両チームとも工夫されているだろうと思われる好ゲームでした。

第一ブロック技術委員 小代 康明

(印西フットボールクラブ・イエロー) 対 (柏イーグルス TOR '82) <決勝>

雲ひとつない秋晴れと暖かな日差しの中、平成21年11月15日(日)千葉県ケーブルテレビ杯千葉県少年サッカー選手権3年生大会が浦安市少年サッカー場にて行われた。浦安市少年サッカー場は、最近開設された人工芝のピッチでコンディションは最高だった。

準決勝を2-1で勝ちあがった印西フットボールクラブ・イエロー(以下「印西」と)と、4-0と後半だけで3点を決めた柏イーグルス TOR '82(以下「柏」)の決勝戦となった。

12時30分、キックオフ。序盤から柏は素早いチェックで相手ボールを奪い、ドリブルと短いパスで敵を圧倒した。柏は、良い姿勢でドリブルをする選手が多く、ボールを失わない。また、縦パスを正確に通せる選手が多い。そんな中、柏選手がトップヘミドルパスをしたところ、印西DFのクリアミスで柏、阿部渚(19番)が素早く奪いドリブルシュート。前半立ち上がり3分で先制点を奪った。その後、印西も攻撃を試みるもなかなかチャンスにつなげることができなかった。準決勝で見たトップへの素早いロングパスも柏の早い寄せにキックができず苦しんだ。前半6分頃には印西は防戦一方となり、なかなかハーフウェイラインを越えることができなくなっていた。前半7分。中央で奪ったボールを左サイドへ展開し、安田博登(4番)が蹴った、センターリング気味のロングキックがゴール右上隅に吸い込まれ追加点をあげた。

その後は柏優勢の試合運びが展開された。数人に囲まれても失わないドリブル。相手のボールを奪う寄せの速さや、体入れの巧さがボール支配率を高めていった。柏は味方のミスにも「ドンマイ」と選手同士の声の掛け合いがあり、モチベーションの高さが見られた。

前半13分、左サイドからの柏のコーナーキック。ゴール前に上がったボールを印西DFがクリアするが、こぼれた先には柏選手が反応した。安岡駿(20番)の目が覚めるような左足弾丸ロングシュートがゴール左に突き刺さった。会場からどよめきが起るほどのシュート。素晴らしいシュートで3点目を決めた。その後も柏ペースの試合展開となり、前半を終了した。

後半柏は、6名の選手交代を行い、スタートした。後半も柏ペースで試合が進んだ。柏はドリブルをする選手に対して、前の選手だけでなく幅を作って横の選手がパスを受けようとするなど連動した動きが多く見られた。柏、岡田信哉(3番)は3年生にしては身長が高く、強引にドリブル突破を試みるなどして果敢にチャレンジしていた。

一方印西は2人の選手交代をして何とか一点を取り返そうとしていた。柏は更に2人の交代をし、ほとんどの選手が入れ替わる形となった。後半10分を過ぎたあたりから次第に印西のボール支配率が高くなってきた。相手DFの裏へのパスや、サイドからのドリブル突破が見られるようになっていった。後半12分、印西、播本慎太郎(8番)が右サイドからゴールライン際を中へドリブル突破しようとしたところ、柏DFの必死の攻撃が、遅れ気味になりフリーキックを与えてしまった。ゴールライン際、ペナルティーエリアすぐ外の地点から大門拓海(3番)がキック。ゴール左に跳びこんできた澤田英(6番)が押し込み、印西が1点を返した。その後も印西は2点のビハインドを取り戻そうと必死に粘りを見せた。フリーキックから味方へ渡ったパスはシュートするものの柏GKのファインセーブに阻まれた。後半の柏はチャンスを作るもののゴール結びつかず、ボールの支配率も次第に落ち、印西ペースとなっていた。最後まで粘りを見せた印西であったが、柏の勝利(柏3-0印西)で試合が終了した。

準決勝でも同じように選手を大きく入れ替え、スタミナ切れを防いだベンチワークの巧みさが功を奏した形となったが、決勝戦でも柏の個人技の高さが目立った。3人に囲まれても突破口を見出すドリブルは見事であった。また、これだけ選手を入れ替えても戦力が変わらない(むしろ準決勝では後半だけで3点を決めている)のは柏の選手層の厚さが窺えた。